

ご挨拶



第 37 回日本二分脊椎研究会

会長 **小柳 泉**

北海道脳神経外科記念病院 院長

第 37 回日本二分脊椎研究会の会長の小柳です。本会は、当初は 2020 年(令和 2 年)7 月 11 日(土)に札幌で、北海道大学医学部学友会館フラテの大ホールを会場として開催予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染(COVID-19)のため、12 月 12 日(土)に延期となり、さらに収束の気配がないため web 開催としました。札幌で開催できないのは残念ですが、研究会への参加は全国のどの場所からでも可能となりました。例年とは全く異なる環境での開催ですが、積極的な討論を行い、実りある研究会にしたいと思います。

さて、私は 1981 年に北海道大学を卒業しましたが、1994 年に開催された第 11 回の本会で、初めて二分脊椎に関する演題発表を行いました。会長は北海道大学泌尿器科教授の小柳知彦先生で、会場は北海道大学構内の北海道学術交流会館でした。当時、私はこの前年に 2 年あまりのトロント留学を終えて北海道大学脳神経外科の助手になっていました。トロントでは脊髄損傷の基礎研究を行ってききましたが、大学に戻り脊椎脊髄疾患を専門とする脳神経外科医をスタートしたばかりでした。トロントでは Hospital for Sick Children の Dr. Hoffman の脊髄脂肪腫の手術を見学する機会もあり、北大に戻ってからは脊髄脂肪腫の手術にも関わることになっていました。この時の研究会では、潜在性二分脊椎に伴った係留脊髄の外科治療という演題名で、北大脳神経外科で手術が行われた脊髄脂肪腫症例の後方視的分析を行いました。この病態の自然経過がわからない、ということが当時も最大の課題でしたが、外科治療が行われる前までは自然経過である、という観点からの分析を行い手術の有効性を発表しました。この時の分析をもとに、その後いくつか論文を発表し、日本二分脊椎・水頭症研究振興財団からは第 2 回研究助成もいただきました。以来、二分脊椎は脊髄損傷とともに、私のライフワークの一つとなっています。日本二分脊椎研究会には、私が札幌医科大学脳神経外科に在籍中の 2005 年に世話人に加えていただきました。札幌で本会が開催されるのは 2001 年の第 18 回(高橋義男先生が会長)以来、3 回目になります(今回は札幌の運営本部からの発信ですが)。また、北海道大学脳神経外科の同門では、1989 年の第 6 回会長の矢田賢三先生以来、二人目となり、大変光栄に思います。

今回の研究会の主題は、「二分脊椎を知る」、としました。二分脊椎は古くから知られている病態ですが、発症機序はいまだ解明されていません。椎弓欠損部の皮膚欠損の有無によって、大きく開放性と潜在性に分かれます。開放性二分脊椎に関しては 1991 年に発表されたランダム化臨床試験以来、葉酸摂取が発症予防に有効であることがわかってきましたが、発症は少なくなっても完全に抑制はされていません。潜在性二分脊椎の代表的疾患である脊髄脂肪腫では、葉酸の発症抑制効果は確認されておらず、手術治療が自然経過に与える影響に関しても結論はでていません。二分脊椎は稀な疾患ですが、多彩な病態を含んだ疾患群であり、多くの臨床科と医療スタッフが関与しなければなりません。病気を正確に知ること、理解することは、基本的なことですが極めて重要です。

本研究会には、延期・web 開催という状況にもかかわらず、20 題もの応募演題をいただきました。午前中は、脊髄脂肪腫の外科治療、開放性二分脊椎の急性期治療に関する二つのシンポジウムを組みました。各々に関連する演題も発表していただき、全体としてシンポジウムとしました。午後は会長講演として、私が係留脊髄の病態を発表いたします。その座長を北海道大学時代の師匠である阿部弘先生(北海道大学名誉教授、当院の名誉顧問)にお願いしました。続いて、成長期・成人期の諸問題、下肢機能障害への対応、排泄管理・社会生活、という三つの一般演題セッションが行われます。会長講演からの午後のセッションは、二分脊椎の患者さん・ご家族の方も視聴できるようにいたしました。本会を通して、二分脊椎の急性期から成人期まで含めた様々な問題点を理解し、今後の課題を明らかにしていきたいと思っております。